

桜の季節もうすぐですね。歴史資料室では、いよいよ昨日から新しい企画展示「あおり遊覧2」を始めました。今回は、桜の季節に人々が集う合浦公園と野木和公園を中心に、その歴史やこぼれ話をご紹介します。

さて、先週もお伝えしましたが、合浦公園には案外と知られていないこともいろいろあります。そこで、今回はかつて公園にあった松の木のお話です。

海に面した合浦公園は、松の美しい公園です。創始者の水原衛作がここを公園地にした理由は、風光明媚で水利がよいことに加え、「三誉の松」があったからでした。そして、この公園を東西に横切る旧奥州街道沿いにある「三誉の松」と、今は失われてしまいましたが「相生の松」というふたつの古木を合せて「浪打五本松」といいました。

三誉の松は、青森市の天然記念物に指定された黒松で、3本の松がひとつの根元から立ち上がるように生えており、弘前藩主が青森を訪れた際にこの松の下で酒宴を開き自ら酒盃を捧げたと伝えられています。今も公園の中心にあって、皆さんもご存知の木だと思います。



三誉の松(歴史資料室蔵)



現在の三誉の松

一方、相生の松は同様に2本の松がひとつの根元から生えたもので、一般に縁結びや長寿の象徴とされます。かつて三誉の松のすぐ近くにありましたが、大正10年(1921)9月26日の暴風で1本が折れてしまい、「相生」ではなくなっていました。さらに、この暴風で園内の山田秀典の石碑も倒れたそうです。今回は、この失われた「相生の松」を写した絵はがきも展示しています。



相生の松(歴史資料室蔵)



相生の松(歴史資料室蔵)

この五本松は、菅江真澄が天明8年(1788)に『外が浜づたひ』にも「綱不知、原別、作り道などの村をへて、群松のあるを五本松とかいひて名だたり」と出てきますので、藩政時代から有名だったようです。

合浦公園は桜を楽しんだり、海で遊んだりできる市民の憩いの公園です。しかし、それだけでなく、園内に点在する記念碑や銅像のひとつひとつが青森にあったできごとを象徴しています。また、公園の敷地や設備は最初から今と同じだったのではなく、社会の変化につれて少しずつ変遷してきました。今回の展示は、そうした話題のほんの一部をわかりやすくご紹介していますので、ぜひ一度ご覧いただき、今年のお花見の際には、昔の合浦公園を思い浮かべていただけたら嬉しく思います。